

基調報告

「大日本帝国」と「在日朝鮮人」の位置について  
—「在日」の国際化のために—

鈴木貞美  
SUZUKI Sadami



在外コリアンのディアスポラと国際ネットワーク戦略シンポジウム  
基調報告  
Symposium *The Korean Diaspora and Strategies for Global Networks*  
Opening Remarks

「大日本帝国」と「在日朝鮮人」の位置について  
—「在日」の国際化のために—

鈴木貞美 SUZUKI Sadami

国際日本文化研究センター *International Research Center for Japanese Studies*

はじめに

日文研では、日本在住の外国人研究者の参加を募ったシンポジウム・シリーズを海外研究交流室の主催で、毎年開催しています。これまでに、ヨーロッパ語圏からの研究者のそれ、中国語圏からのそれ、コリアン語圏からのそれを、それぞれ二回ずつおこなってきました。第七回目にあたる本シンポジウムは、コリアン・ディアスポラをめぐって、シリーズでシンポジウムを展開してこられたイェール大学のヒュースティン・コー先生の提案を受けて、開催するものです。海外の研究者に開かれた研究機関として、日文研は、このような提案には積極的に応じてきましたし、東アジアにおける文化交流を促進する上でも重要な課題と考え、研究の場を提供する役割を担うことにいたしました。これまでも、中国作家協会の副会長で、現在、文化大臣にあたる職についている陳建功氏の提案で「1960年代青年運動」をめぐる在住研究者シンポジウムを開催したことがあります。しかし、本シンポジウムは二国間ではなく、アメリカから7人の参加者を得て、韓国、そして日本と、国際的によりオープンなかたちで開催できたことが、ひとつの特色です。ここに提案者のコー先生、そして参加者の皆様に、まず、感謝の意を表したいと思います。

コー先生のご提案は、故国を離れ、海外でひとつの集団、ひとつの社会をつくって暮らすコリアンを対象にする研究ですが、とりわけ、その内面に注

目する場合には、近現代日本で暮らした人びとによって書かれた文芸作品に注目すべきだ、そこで、いわゆる「在日コリアン」の文芸を対象にしたセッションをふくむシンポジウムを行いたい、というものでした。「在日」コリアンの問題については、「在日」コリアンの方がたが多く日本の大学に勤めておられることもあり、プロパーの研究は相当蓄積されています。が、とくに近年、日本、韓国双方で、いわゆる「日帝時代」の文芸作品についての研究がかなり進んでおります。日文研にも、そのような課題をもつ研究者が多数訪れています。

また、本センターでは、現在、松田助教授を研究代表者として、朝鮮半島と台湾における警察行政の比較を中心とした共同研究を展開しています。ここで、本シンポジウムの日文研側の実質的な担当者は、この松田助教授であることを、ご紹介しておきます。

また、劉建輝助教授は、旧「満洲」の文化について共同研究を組織し、現在、そのまとめにかかっているところですが、いわゆる日帝時代のコリアンを考える場合、旧「満洲」は抗日運動のひとつの基地にもなったことなど、密接な関連があります。

ちなみにコリアンの人口は、今日、朝鮮半島に南北あわせて約6600万人とされていますが、在外では外国国籍を取得した者まで含めて約520万人にのぼり、もっとも多いのが中国で、<sup>チーリン</sup>東北部の吉林省延辺朝鮮族自治州を中心に約196万人とされています。ついでアメリカ合衆国に約185万人、日本に約66万人、ロシアのサハリン州や沿海地方（沿海州）、中央アジアのカザフスタン共和国、ウズベキスタン共和国など旧ソ連にあたる地域に約45万人、カナダに9万人、中南米に9万人、その他10万人といわれています。

日本と中国で暮らすコリアンなど他地域との比較、また、故郷を離れての他の地域でひとつの集団をつくって暮らす別の民族との比較もしてみたい、などなど、視野を広くとることを心がけましたので、ちょっと欲張りすぎの企画になったかもしれません。

なお、旧「満洲」と関連しまして、今週から来週にかけて、日文研と中国・東北師範大との共同で、東アジア文明についての研究のプロジェクトを長春で展開しております。現在、山折所長は、そちらに出かけておりますが、10日、金曜日には、皆様にご挨拶する予定でおります。私は所長と入れ替わりで、劉助教授一行と合流し、来週前半のシンポジウムに参加します。

さて、本シンポジウムは、私が海外研究室長をつめていたときに、コー先生とお約束したものであったのですが、関係各位の協力をえて、こうして開催の運びになったことを、たいへん喜んでいましたところ、コー先生から、基調報告をやれ、とのご命令で、こうして、ここに立つことになりました。私



の専門は日本近現代の文芸研究で、文学史の書き換えを中心に仕事を進めておりますが、これまで「コリアン・ディアスポラ」という問題についても、「在日」コリアンの文芸作品についても、論文は一本も書いたことのない、いわば門外漢です。そのことを、まずご承知おきください。

ただし、現在、私は学術総合型の共同研究を三つ、提案し、いくつかのプログラムを推進しています。そのひとつは「生命観の探求」で、これは自然科学系と人文社会系との統合型のものです。もうひとつは「ジャンル=概念史」研究です。今後の国際的、学際的な文化研究を展開してゆく上で、近代の学問各分野が、どのように編成され、再編成をくりかえしてきたのか、その歴史を総括し、将来の展望をひらく一助にしようというものです。とくに東アジアにおいては西欧近代の学問編成を受け取り、いわゆる伝統的な体系を組み替えてきた歴史があり、共通する問題も多く、研究者相互の連携が不可欠となっています。そして、もうひとつが「日本帝国」の文化史研究です。今日、アジア歴史資料館が、外務省、防衛庁の戦前の関係資料を全面公開しており、これによって、これまで伝説化した言論が飛び交っていた状態は解消されましたが、しかし、文化史については、まだまだ資料の掘り起こしの段階にあり、これも東アジアの研究者の密接な連携と実際に資料を前においての議論が必要です。

そして、私自身、いわゆる「外地」の各地と「内地」の文化史を総合的にとらえる視角をもたない限り、この時期に書かれた文芸作品の読み解きができないということを痛感してきましたが、きょうは、まず、その点からお話したいと思っています。

つい最近も、ある英語圏の論文の審査をしていて、ちょっと驚いたことがあります。一時期カナダに渡っていた日本の女性作家——田村俊子（1884-1945）という作家です——が、一九三〇年代の後半に、民族問題をテーマにした小説を何本か書いたことを取り上げ、これまで評価の低かった、この時期の彼女の作品を再評価しようとする論文でした。その姿勢はよいのですが、この時期に民族問題を小説のテーマに選ぶこと自体が、ファシズムや日本民族主義にそまった当時の風潮に対する「抵抗」であるかのように論じていたのです。この一九三〇年代後半から四〇年代はじめにかけては、日本在住の朝鮮人作家が日本語で書いて相当活躍していた時期です。いわば日本の文芸ジャーナリズムでは、民族問題をテーマにすることがひとつのブームになっていたのです。

しかし、これは、その論文の著者の勉強不足というだけのことではないようです。いわゆる植民地で展開した文芸作品や、そこを舞台にとったもの、また、これまで「親日」のレッテルを張ってすませられてきた作家たちにつ

いて研究がさかんになってきてはいても、それらの研究が、みな、この時期を日本の民族主義の高揚期であるという前提に立っていたのでは、「民族問題」への関心が高まった時期という認識は生まれないでしょう。日本帝国主義の内外における文化政策と、その変遷について、まだ、はっきりさせられていない点があるように思えます。

戦前期における「在日」コリアンの問題を考えるに際しても、これらについて明確な見取り図が大切でしょう。朝鮮半島の作家たちについても、「親日」や「反日」のレッテルを貼って済ますのでない限り、いったい、どのような内容の思想なのか、どのような点で「抗日」なら「抗日」の要素が見えるのか、それを問うためには、当の「日本帝国」が、どんな政策を展開していたのか、まず知っておかなくてはなりません。そして、それを分析するためには朝鮮半島だけを見ていても不十分であり、他の「外地」と関連させ、比較して見ていかなければ、わからない、というより、まちがう、というのが、私の方法的な立場です。それが、第1点です。

第2点は、本シンポジウムのタイトル、「コリアン・ディアスポラ」についてです。私は、これに少し躊躇するところがありました。「ディアスポラ」という語が、最近、あまりに便利に用いられすぎているきらいがあるからです。比喩として用いるにしても、異文化のなかで、ひとつの集団ないしは社会をなして生活していることが最低限の条件になると思っています。「コリアン・ディアスポラ」は、この条件は満たしています。しかし、ディアスポラには、もうひとつ「故郷喪失」という問題が付随するようにも感じられます。その点、コリアンの場合は、はたして妥当するか、という懸念が残ります。これについては、第二次大戦後の問題として、述べてみたいと思います。

## 1. 日本の「帝国」意識とコリアン

まず、中国と朝鮮半島の民族演劇について戦時中にふたりの日本の作家が書いた文章を紹介したいと思います。そのひとつは、1938年11月、武漢攻撃に新聞記者として従軍した一人の作家が書いたものです。日本軍が、この年1月に占領した南京で、中国人が中国語で演じる伝統演劇が保証されていることを見て、このまま存続すべきだ、という意見を書き、特務機関員に、それが存続される方針であることを確認した、と書いています。そして、彼は戦争終結後、日本人は中国から引き上げるべきだ、とも書いています。なお、この本は1939年秋に出版されています<sup>1</sup>。

もうひとつは、1940年10月17日に「大政翼賛会文化部」に編入された

「大陸開拓懇話会」という組織から「満洲」に派遣された一人の日本の作家のもので。途中、朝鮮半島でコリアンの演ずる現代劇を見て、古典演劇が観られなかったことを残念と書き、その劇場のコリアンの支配人が「日本語で現代演劇を上演できるようにするのが夢だ」と語ったこと、その弟の劇作家が「これからは日本語で脚本を書かねばならないので大変だ」と述べていたことなどを紹介しています<sup>2</sup>。この本は1941年に出版されています。

戦時中でも、この程度のことは書けた、ということは確認できますが、検閲が厳しい中での執筆ですので、その底に、どんな思いが秘められていたのか、どんな立場から、こういうことを書いているのかを分析することは、なかなか容易ではありません。それ以前ですと比較的容易ですが。なお、このような事態にいたるまでの朝鮮半島の経緯と在日朝鮮人の形成過程を簡単なふたつの年表（資料①）に、まとめておきましたので、参照しながら聞いてください。

たとえば、13歳で朝鮮半島から日本にやってきた<sup>キム ソ ウン</sup>金素雲（1907-81）が北原<sup>はらはくしゅう</sup>白秋（1885-1942）の推奨を受け、『朝鮮民謡集』（1929）を出したことはよく知られています。『<sup>おんもん</sup>諺文朝鮮口伝民謡集』（1933）も民間の思想家、<sup>つちだ きようぞん</sup>土田杏村（1891-1934）の尽力によって刊行され、双方の抄訳『朝鮮童謡選』『朝鮮民謡選』（1933）が岩波文庫になってもいます。

北原白秋は、文部省の「唱歌」に対抗して童謡運動を起こした詩人で、子供の心の自然発生性を尊重し、また、アジア主義の一面ももっています。彼は1929年前後に樺太や中国に旅行をしています。彼の「ペチカ」というたいへんよく知られた童謡は樺太か「満洲」のペチカを歌ったもののだということがわかります。その白秋が金素雲を推奨した理由は明らかでしょう。

白秋の童謡運動は反体制運動ですが、しかし、彼のアジア主義や民族性の尊重の態度は、必ずしも、反体制とはいえません。西欧列強の侵略から、アジアを解放、独立させるという明治維新时期以来、日本がとった国際戦略のひとつののっとったものともいえるからです。明治期以来の日本について、かなり長い間、福沢諭吉の「脱亜入欧」のスローガンに代表されるような「西欧化すなわち近代化」を進めるという戦略であったかのようにいわれてきました。しかし、福沢諭吉がそれを唱えたとき（1885）には、すでにエリート層に漢学復興と伝統重視の方向が根を張ろうとしていました。西欧近代国家は「伝統」を再組織化して文化ナショナリズムを形づくりませんが、それにならいつつも、アジア主義が伴うのが日本の文化ナショナリズムのひとつの特徴です。

しかし、他方では、日本は、とりわけイギリスと結んで、国際的な地位の向上をはかり、アジアに対する支配力を強めるという戦略をとってきました。このふたつを統一的に展開しえたわけではなく、場当たりにバラバラに、

そしてジグザグした道を歩きました。東アジアの諸地域に「親日」と「反日」の勢力が生まれたのは当然のことですし、このダブル・スタンダードによる政策の変化に対応して、「親日」も「反日」も様相が変化するのは当然です。

そして、第一次大戦後には国際的に民族自決権の主張が強まります。朝鮮半島で「三・一」運動が高揚し、よく知られているように総督府の政策は「文治政治」に転換しました。この民族自決権の主張を文化面に翻訳したのが文化相対主義です。日本の修身の教科書も国際協調をうたい、一九二〇年代の日本の知識人の間にも文化相対主義が広まります。白秋が金素雲を推奨し、朝鮮の民族性を尊重した態度は、このひとつの現れと見てよいでしょう。

そして、金素雲の『朝鮮童謡選』『朝鮮民謡選』（1933）が岩波文庫になったのは「満洲」建国後のことです。私は、これを偶然のこととは思いません。1910年に「併合」した朝鮮半島と異なり、傀儡政権を立てて1932年に独立国家を装った「満洲国」では「民族協和」のスローガンを掲げました。その国語は中国語、日本語、ところにより蒙古語、公用語は中国語、日本語の併用でした。ロシア人居住地区ではロシア語で教育を行ってもしました。「満洲映画協会」は中国語の映画もつくりましたし、演劇も中国語で上演もしました。そして「日満文化協会」は中国語による文芸雑誌『芸文誌』（1939-）に資金援助もしています。そして、「漢族」よりも少数民族を優遇することで統治をよりスムーズにするような政策もとられました。今日の言葉でいえば、文化多元主義や相対主義よりも、多文化主義に近い統治政策がとられたのです。もちろん、背後から関東軍が眼を光らせていたことを忘れてはなりません。

「満洲」の「民族協和」は、しばしば「五族協和」ともいわれていますが、その場合の五族は「満、漢、鮮、蒙、日」です。ここで複雑なのは朝鮮半島の朝鮮人は日本国籍とされていたために、小作農らが「満洲国」に移住した場合に、国籍がとれないのがタテマエでした。1910年の「日韓併合」が西欧列強の、いわば古典的な植民地統治でなく、「同祖論」を唯一の根拠として、日本の領土への編入というかたちをとったことによって、国籍問題をはじめ、政策や意識にもさまざまな屈折や陰影が生じたとは私は考えています。そして、この問題は、第二次大戦後の日本列島内の朝鮮人の国籍問題とアイデンティティの問題にも、かなりの影を投げることになります。

朝鮮「併合」と独立国を標榜する「満洲国」の形成は一見、正反対に見えますが、植民地再分割競争の時期に、日本が遅れた帝国主義として海外膨張するにあたって、18、19世紀型の「植民地」をつくるができなかったために、ときどきの国際情勢にあわせて、その緻密化を、はかっていったと見るができます。「日韓併合」という措置がとられたのも「日清戦争」

の際、三国干渉を受けて大陸から引っ込んだ経験が活かされているともいえます。朝鮮半島と「満洲」を同じく「植民地」として論じること、ないしは19世紀型の「植民地」と同一視することは本質還元主義（essentialism）に陥る可能性が高いということです。

台湾と樺太の南半分は日本が目的として獲ったものではなく、いわば「戦利品」です。ほかにも対米英戦争までの間に、租借地、満鉄の行政地域、租界、委任統治、軍政とさまざまな形態が展開しました。私は、これらを一括して呼ぶ場合は「外地」と呼んでいます。各地の法律や政策はそれぞれ異なっています。が、それなりに関連もしています。「満洲」で、「漢族」よりも少数民族を優遇する方式は、すでに台湾統治で行っていました。台湾では農地に関しても、あとからの日本人入植者に対しては、「漢族」よりも粗悪な土地しか与えられなかったということを「プロレタリア文学」の流れをくむ作家が小説に書いています。また、三・一独立運動ののち、いわゆる「文治政治」に転じてからの朝鮮半島で「親日」派を養成してゆくことは積極的に行われました。

この「満洲」建国から日本の敗戦までを「十五年戦争」期とする区分がかなり用いられていますが、もし、それを用いるとするなら、その内実は、日本人が、多くの民族を抱えた「帝国」としての意識をもちはじめた、という意味になるでしょう。朝鮮半島における「皇民化」政策についても、最近では、この「十五年戦争」期と重ねて論じられていますが、これは訂正を要すると思います。

1937年7月に日本政府は日中戦争の本格化に踏み切り、派兵を契機に「内地」では一挙に戦時色がひろがります。第一次近衛文麿内閣は9月に「国民精神総動員実施要綱」を発表し、1938年4月に「このえ ふみまろ国家総動員法」が公布されます。これに対応して朝鮮半島では1937年に「皇国臣民の誓詞」を制定し、1938年に「国民精神総動員朝鮮連盟」を結成、神社参拝、宮城遙拝、ようはい日の丸掲揚などが強要され、教育令が改定されて、学校での朝鮮語の教育、使用が禁止されます。官庁でも日本語の使用が強要され、朝鮮語学会も解散させられました。これが「皇民化」政策と呼ばれるものです。それまでは同化政策とともに、識字率を高めるために——それは、日本による統治をスムーズにするためであることはいうまでもありませんが——朝鮮語教育も行われていました。

ところが、その後、金素雲の朝鮮語詩の翻訳アンソロジー『乳色の雲』（河出書房、東京、1940）が「内地」で刊行されています。そして、この年には、さらに次のふたつの朝鮮半島の代表的作家たちのアンソロジーが東京で刊行されます。シンケン伸建編訳『朝鮮小説代表作集』（教材社、東京、1940）

(翻訳13編)と『朝鮮文学選集』全三卷(赤塚書房、東京、1940)(翻訳14編、日本語作品2篇)です。後者は在日朝鮮人作家の張赫宙テウハクジュ(野口稔、1905-?)を編集代表とし、ほかに在朝鮮の大物作家である兪鎮午ユジンウ(1906-?)、日本人としては秋田雨雀あきた うじやう(1883-1962)、村山知義むらやま ともよし(1901-77)が編者に加わっています。兪鎮午は、第二次大戦後、大韓民国の憲法を起草し、野党第一党の党首として活躍する人です。秋田雨雀はアナキズムから一時、ソ連寄りに転じたりベラルな思想の持ち主の劇作家、村山知義はドイツ帰りで左翼思想の持ち主で、表現主義、構成主義の前衛演劇などに活躍した人です。つまり、「内地」で「国家総動員法」が実施され、朝鮮半島で「皇民化」政策が展開しているさなかに、朝鮮語の翻訳が出されているわけです。これを、どのように考えたらよいのでしょうか。いくら考えていても答えは見つかりません。

ここで、「満洲」関連に目を転じてみますと、この同じ年にバイコフ(Nikolay Apollonovich Baykov, 1872-1958)の『偉大なる王』(Velikiy Van, 1936、長谷川濬訳 1940)が流行し、その前年から大内隆雄訳、満人作家選『原野』(三和書房、1939)(9作家12作品)、同『蒲公英』(三和書房、1940)(8作家12作品)、そして「満人」すなわち在「満洲」中国人作家、古丁(190?-?)の長篇『平沙』(中央公論社、1940)、林時民詩集『新しき感情』なども翻訳刊行をみています。この動きは山田清三郎編『日満露在満作家選集』(春陽堂、1940)(中国2、ロシア2、日本4)、川端康成・岸田国土・島木健作・山田清三郎・北村謙次郎・古丁編『満洲国各民族創作選集』第一卷(創元社、1942)(中国4、ロシア2、日本14)、第二卷(創元社、1944)(中国6、ロシア3、日本8)の刊行に引き継がれます。浅見淵編で満鉄従業員の同人雑誌『作文』の選集、『廟会』(竹村書店、1940)、在「満」日系作家の選集『地平線を行く』(赤塚書房、1942)も出されます。また、台湾の作家たちの選集、個人の単行本も1940年から続々と出されます。

それまでも在日コリアン、在「満」の日本人作家は文芸雑誌などに作品を発表しており、注目もかなり高まっていました。しかし、この朝鮮半島の朝鮮語作家、「満洲」のロシア人、中国人の作家をはじめ、日本人をふくめて「外地」の文芸に対する関心が高まったことは明らかに新しい事態です。

この事態を文芸評論家の浅見淵は「朝鮮作家論」(1940.4)の中で「日支事変や第二次欧州大戦の勃発と共に、民族の問題が改めて一般の関心を喚び起し、それが契機になって、支那の現代文学や満洲作家の作品が紹介された。それら民族を包摂するために、それらの民族を理解しようとしてゐる一般の気持を反映してであらう。この浪に乗つて、朝鮮文壇に於ける現代朝鮮作家の作品も紹介されはじめた」とのべています<sup>3</sup>。ひとまずはうなずける評言といえましょう。1930年代後半の「民族問題への関心の高まり」と

は、先に述べたように、多くの「外地」を抱えた日本の「帝国」意識が生んだものといつてよいでしょう。そして、この時期の「満洲」では、ドイツ・ナチズムのように排外主義をとらないということが公然と主張されてもいます<sup>4</sup>。「内地」の文芸ジャーナリズムにも、それに似た意識がひろまっていたことが、これからわかります。

日本軍は1938年1月に国民党政府の南京を落とし、そのとき、一南京大虐殺が行われたわけですが—先に見たように4月には「国家総動員法」が公布されます。これをもってファシズムとすることが多いのですが、これはイタリアのファシズムやドイツのナチズムと異なり、大衆運動の盛り上がりや大衆の支持によってつくられたものでないことは誰でもが認めるところです。もし、いうとするなら上からの「ファシズム」ですが、それは軍部と政府の間に対立を抱えたものですし、しかも、排外主義ではなかつたのです。

1938年11月3日に、対中国戦争の和平工作に失敗した第1次近衛文麿内閣によって、政治・経済・文化などにわたる日・「満」・中国の互助連関の樹立をうたう「東亜新秩序建設声明」が出されています。これによって、それまで「防共」の一点張りだった対中国戦争のスローガンが一変したわけですが。これを侵略戦争の「合理化」と片づけることはやさしいことですが、それでは文化政策の実際にも、そして「内地」と「外地」で暮らしている人びとの意識も分析することはできません。そして、1940年を前後して「外地」の作品の翻訳がまとまって出たことは、この「東亜新秩序建設声明」を受けた現象であり、少なくとも一—というのは、政府や内務官僚とのつながりがどの程度あったかどうか、まだ解明できていないのですが—近衛文麿を中心とした「新体制運動」に便乗しようとする文芸界の動きだったといえるでしょう。つまり、それは、多くの民族の「協和」をはかる「帝国」としての日本の意志の表現であったわけです。

先にあげた浅見淵の文章には、朝鮮の作家たちの朝鮮語への「執着」の理由のひとつとして、学校教育を日本語のみにする方針に対する危機感があるという指摘もあります。そこに国策に対する批判は一切見られませんが、朝鮮文学が活発化することは歓迎しています。

さて、ここで、朝鮮半島で、朝鮮語を奪おうとしたのは、排外主義ではないのか、という疑問が出て当然です。この「帝国」の意志の表現は朝鮮半島に関する限り、明らかに矛盾しています。先の「東亜新秩序建設声明」は日・「満」・「華」(のちには、王精衛政権を指すことになります)の「互助連関」であつて、「台」や「韓」は入っていません。朝鮮半島は「併合」という措置をとったことにより、「日本」の内部とされていたからです。「満洲」の「民族協和」とは異なり、朝鮮半島では民族意識を無視して、「日本



国民」として強引な「皇民化」を図ることがなされたのです。これこそ、アジア解放という理想と日本支配の強化という現実との乖離<sup>かいり</sup>を最も端的に示したものだといえましょう。

この「東亜新秩序」構想は、1940年、第二次近衛文麿内閣によって、アジア・太平洋圏に拡大され、「大東亜共栄圏」構想（発表は1941年1月）として展開しますが、この「共栄」は、はっきり名ばかりのものだったといえます。1941年、朝鮮半島で朝鮮語の新聞、雑誌が廃刊とされたのと並行して、「満洲」でも「日満一体化」が強行されてゆきます。それに対して、中国語の演劇を上演をやめることなく、「やがては日本語で」と政府をごまかそうとする文化指導者もいましたし、最後まで「日満融和」にかけた人びともいました。が、それは本日のテーマとは別の話です。

そして、軍部が主導権を握って、1941年12月、対米英戦争の開戦を宣言し、これによって、一挙に、それまでの矛盾の解決を図ろうとします。実際に円立ての経済圏が一定地域で一年半ほど成り立ちましたので、この構想が、まったくの夢に終わったわけではありません。しかし、それ以前に、日本帝国主義は、その破産に向けて、すでにその内部矛盾が大きく開いていたといふべきでしょう。

小説に関して、朝鮮半島関係では、その後、「朝鮮文人協会」（1939設立）編の日本語短篇集『朝鮮国民文学集』（東京、東都書籍、1943）（9篇、うち翻訳1、日本人作家のもの2）、日本語短篇集『半島作家短編集』（朝鮮図書出版、ソウル、1943）（8篇）、石田耕造<sup>チエ ジョソ</sup>（崔載瑞、1908-?）編の『新半島文学選集』全二巻（人文社、ソウル、1944）（15篇、うち戯曲1、翻訳1、日本人作家のもの6）がつづきます。しかし、これらを先の朝鮮語小説の翻訳選集と同列において論じることにはできないと思います。これらは明らかに日本語の作品を主としたもので、「皇民化」政策の一環なのです。

以上、出版物と当時の政治、文化状況の変遷を述べてみました。個々の作品、作家たちの内面に立ち入って分析する前提として、彼らが活動した舞台について、再考しておく必要がある、と思ったからのことです。簡単にまとめてみますと、日本国籍を持ちながら、差別と同化政策から挟撃された「在日朝鮮人」という存在は、日本が朝鮮半島を「併合」し、「日本」の一部として形つくったことによって生まれたものであり、その特性を充分考慮すべきであること、二〇世紀日本の「内地」および「外地」の文化現象は、西欧帝国主義からのアジアの解放と、日本のアジア支配というダブル・スタンダードの交錯としてとらえること、そして、その交錯についても、ときどきの文化政策の変化を見極めなければ、それに対するリアクションも、内面の反応も分析できないこと、そして、それは日本人、在日朝鮮人、そして、朝



鮮半島のコリアン、中国人などの人びとの活動について考える際にも共通するものなのです。

## 2. 狭義の「コリアン・ディアスポラ」の形成

第2の点について、ごく簡単に私の考えをのべたいと思います。「ディアスポラ」という語を、もし、故郷を失い、異文化の中で暮らす社会集団と狭く定義してみるなら、それは戦前期ではなく、また戦後期でもなく、むしろ1975年以降に顕著になる「在日」として生きることを選択したコリアンたちにこそ、よくあてはまるのではないか、ということです。そして、私はそこに、ある大きな可能性を見たいと思っています。

「在日朝鮮人」の一世は、半島への帰属意識が強く、それゆえ、祖国の南北分断という事態に対して、どちらかの国籍を選ばなくてはならない立場に置かれました。しかし、そのとき、幻の統一国家への帰属を願って、全体からいえば少数ですが、その選択を拒否した人びともいました。作家、金石範<sup>キンソクボム</sup>（1925-）も、その一人です。彼は、いわば無国籍の道を選んだわけです。つまり、私のいう狭義の「ディアスポラ」の道を自ら選択したわけです。その選択に働いた思いには、私などのような者の想像を超えたものがあると思いますが、その存在自体が、国家という現実、民族という概念を根源から問いなおすものだと思います。

今日、在日コリアンのほとんどが二世、三世となり、朝鮮半島への帰属意識が薄まり、「在日」という存在を自覚して生きるという道を歩む人びとがかなり多くなっているといわれています。これも、多くの実存的な困難を伴う選択であろうと思います。しかし、その困難もまた、国家や民族という観念を観念的にではなく、具体的に、そして根底から問い続ける人びとに多くの糧をあたえてくれるものと私は思います。そのような意味で、狭義の「コリアン・ディアスポラ」の生き方が、国際ネットワークを通じて、日本文化に対してのみならず、世界の人びとに認識されてゆくことを望みたいと思います。本当の意味での国際化の時代を開くために。

(以上)

<sup>1</sup> 井上友一郎「従軍覚書」、『従軍日記』、竹村書房、1939、261頁。

<sup>2</sup> 井上友一郎（1909-97）、豊田三郎（1907-59）、新田潤<sup>じゅん</sup>（1904-78）の三人が「大陸开拓話会」の派遣で「満洲」を訪れ、三人三様の旅の記録を日付順に編んだ『満洲旅日記』（1942）の中で、豊田三郎が記している（復刻版、ゆまに書房、2002、52頁）

<sup>3</sup> 浅見淵『文学と大陸』、図書研究社、1942、81-82頁。

<sup>4</sup> 鈴木貞美『『満洲浪漫』の評論』（『満洲浪漫』復刻版全七巻別巻研究編、ゆまに書房、2003、98頁）を参照されたい。

その他の参考文献

白川豊『『朝鮮国民文学集』について』、白川豊監修『日本植民地文学選集〔朝鮮編〕』  
1（復刻版、ゆまに書房、2000）

## 日本帝国主義による朝鮮支配の変遷（資料①）

- 1904年 日露戦争開戦、「日韓議定書」  
1905年 ポーツマス条約締結、「第二次日韓協約」（乙巳（いつし）保護条約）  
⇨義兵運動 国文運動 など民族的自覚の高揚  
〔第一期〕 「武断政治」期  
1910年 「日韓併合」  
総督府：「憲兵警察」の治安取締り 言論・集会・結社の自由を奪う「内地」に対する食料・原料の供給地、市場としての整備  
「土地調査事業」（1910～18）、「会社令」公布（1910）  
1911年8月 「朝鮮教育令」：同化教育開始  
1919年 三・一独立運動 （←「二・八宣言」）←民族自決権、ロシア革命  
〔大韓民国臨時政府（上海）〕  
〔第二期〕 「文治政治」期  
普通警察による治安体制強化  
1920年 民間の新聞、雑誌の発刊を許可。『東亜日報』『朝鮮日報』『開<sup>かい</sup>  
<sup>びやく</sup>關』等  
「地方自治」、制限選挙、親日派の育成  
「産米増殖計画」小作農増加→「満洲」移住。肉体労働者として「内地」へ。  
1922年 朝鮮教育令を改定、同化教育を拡大強化  
1926年 6.10万歳運動 民族主義者＋共産主義者＝新幹会（1927）民族的権利の回復  
1929～30年 光州抗日学生運動、元山ゼネスト  
1932年 「満洲国」建国 〔抗日遊撃隊（金日成）〕

- 〔第三期〕 「皇民化政策」期（「十五年戦争」期論は採れない；「満洲」は「民族協和」）1937年 「皇国臣民の誓詞」制定
- 1938年4月 「国家総動員法」公布：国民精神総動員朝鮮連盟結成  
神社参拝、宮城遙拝、日の丸掲揚など強要  
教育令改定 学校での朝鮮語の教育、使用を禁止、官庁でも日本語使用  
陸軍志願兵制度実施
- 1939年 「創氏改名」強要
- 1941年 朝鮮語の新聞、雑誌の廃刊、朝鮮語学会の解散
- 1942年 〔朝鮮独立同盟（朝鮮人社会主義者）〕
- 1944年 徴兵制実施〔韓国光復軍（金九）（重慶）〕〔建国同盟（呂運亨）〕  
朝鮮人労働者の強制連行
- 1938年4月 「募集」形式の連行開始
- 1939年7月 「国民徴用令」の発令：「朝鮮人労働者内地移住に関する件」
- 1942年2月 「官斡旋」形式の強制連行へ移行
- 1944年8月 「徴用」形式の強制連行へ移行（→資料”〔第1期〕差別と同化政策）

## 在日コリアン（資料②）

- 〔第1期〕 1920年代～1945年(25年間) 在日朝鮮人の形成
- 1910年 韓国併合時：2000人  
重化学工業化期 低賃金肉体労働力として「内地」に移住
- [1919年2月8日 東京「朝鮮青年独立団」二・八独立宣言書] →三・一独立運動
- 1920年 3万人／毎年2万人ずつ増加
- [1923年9月 朝鮮人虐殺事件]  
北星会など思想団体、在日本朝鮮労働総同盟など労働団体の活動
- 1930年 30万人／毎年6、7万人ずつ増加 土地を奪われて窮乏化した農民
- 1938年 80万人 (日本人労働者→兵士)
- 1939年 強制連行72万5000人
- 1945年8月 240万人

## 差別と同化政策

差別 「土工」、「職工」、「坑夫」 賃金は日本人労働者の約半額  
日常生活で朝鮮べっし蔑視・排除

同化政策 子供:日本学校に就学

1939～ 大人:協和会に加入

1940～: 創氏改名を強要、学徒動員～

朝鮮人労働者:平均して30～40%が逃亡(1939～45)

争議1784件、参加人員10万8978人

死傷者約30万人、うち死亡者は6万人(推定)

[第2期] 1945年～70年(25年間)民族団体主導により生活権の確保へ

1945年8/15 敗戦(降伏文書調印は9月2日)大韓民国建国

1945年8～ 約170万人自力で帰国 引揚援護局関知せず

1946年3月 65万人在留(51万人帰国希望)←GHQ 持ち帰り財産を厳しく制限

1945年10月 在日本朝鮮人連盟(略称朝連)結成

「日本国民との友誼保全、在留同胞の生活安定、帰国同胞の便宜」

各地に朝鮮学校を設立

1946年10月 在日本朝鮮居留民団発足(略称民団)

1946年12月 GHQ 帰国拒否者とみなす。労働力市場からは締め出し。

1947年5月 外国人登録令適用

1948年1月 日本学校への就学を強制(文部省学校教育局長通達)

1948年3月 都道府県教育委員会;朝鮮学校閉鎖命令、第一次朝鮮学校閉鎖

1948年9月9日 朝鮮民主主義人民共和国建国

1948年10月 民団;在日本大韓民国居留民団と改称(略称は同じ)←大韓民国が公認(朝連は共和国支持)

1949年9月 朝連解散させられる。

1949年10月 朝鮮学校を全面閉鎖(第二次朝鮮学校閉鎖、朝鮮人学校事件)

1950年6月 朝鮮戦争勃発(～53年7月) 在日朝鮮人の分断と「在日」の固定化

1952年4月 サンフランシスコ講和条約発効、日本国籍から離脱、外国人としての扱い「法126」

1955年5月 在日朝鮮人総連合会(略称朝鮮総連)発足、朝鮮民主主義人民共和国の在外公民として

朝鮮学校の再建、朝銀信用組合の営業、共和国への帰国運動(1959年8月～1967年、8万8600人)

- 1965年6月 日韓条約（日韓基本条約）締結、日韓法的地位協定  
韓国籍を有し、永住を申請する者には「協定永住」権を認定  
民団「協定永住」の方針
- 1965年12月 朝鮮学校不認可（文部次官通達）→民族教育を守る運動
- 1968年4月 東京都知事美濃部亮吉 朝鮮大学校を各種学校として認可
- 〔第3期〕 1970年以降 日本永住、市民権の保障の獲得へ（←二世、三世の増加）
- 1974年 うち日本生まれ75%（一世は本国に帰属意識）
- 1975年 在日朝鮮人人口64万7156人
- 1980年 「協定永住」者35万人
- (1980年代 毎年5000人前後が帰化)
- 1982年1月 「特例永住」出入国管理令を一部改正（おもに朝鮮籍の者、27万人）
- 1983年 全国在日朝鮮人教育研究協議会（略称全朝教）  
「在日朝鮮人としてのアイデンティティ」
- 1985年1月 国籍法の改正、民族名による帰化可能 両親のどちらかが日本籍なら子供は日本籍可能。  
「日本籍朝鮮人」or「朝鮮系日本人」  
在日朝鮮人人口68万3313人 在住外国人中85%  
在住外国人中64%
- 1990年
- 1991年5月 入管特例法（「協定永住」「特例永住」一本化）
- 1993年11月 朝鮮総連 日本永住方針
- 1994年 民団→「在日本大韓民国民団」
- 1995年 在日朝鮮人人口66万6376人 うち日本生まれ95% 在住外国人中49%  
全結婚数のうち日本人との結婚が81.6%8割 帰化した者20万人。  
在日コリアン人権協会 ←「民族差別と闘う全国連絡協議会」（1974年）  
就職および社会保障の適用における国籍条項の撤廃
- 2000年5月 「国籍離脱者戦没者遺族等に対する弔慰金等支給に関する法律」
- 1992年 外国人登録法改訂 16歳 ←指紋押捺拒否運動
- 1995年 永住外国人の地方選挙における選挙権を最高裁が認める  
全国在日朝鮮人教育研究協議会（1983年、略称全朝教）  
「在日朝鮮人としてのアイデンティティ」

2002年      日本学校（9万人）、韓国学園（2000人）、朝鮮学校（1万  
8000人）  
朝鮮奨学会、民族共生教育